

小谷村観光地域づくり審議会（第7回）

令和2年8月3日（月）

【観光振興課長（関）】 それでは、皆様大変ご苦労さまです。

定刻となりましたので、ただいまから第7回小谷村観光地域づくり審議会を開会とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず初めに、今日は村長が来ておりますので、中村村長よりご挨拶を申し上げます。

【村長（中村）】 皆さん、こんにちは。

コロナ禍の中の開催というような形が大分ずれ込んでしまった感もありますけれども、いよいよ第7回の観光地域づくり審議会の開催になりました。委員の皆様においては、ほんとうに駆けつけていただきましてありがとうございます。

今回、諮問をいたしまして、それで、今度、答申をもらうというような形の中において、いよいよ観光地域づくり審議会も大詰めのところに来ているんじゃないかなというふうに考えております。今日の内容を見てみましても、答申に向けての位置づくりであるとか、そういったことが話し合われるのではないかなというふうに考えています。観光地域づくり審議会、これをもって、この答申をもって、私のほうで方向づけ等をしっかり出していき、それからスタートというような形のものに、皆さんからもそんなお話を頂いております。ですから非常に大切な内容というふうに考えておりますので、私もほんとうに肝を入れてやっていかないといけない、観光についてしっかりやっていかなきゃいけないと考えている内容でありますので、ぜひとも今日もいい審議内容となりますようお願い申し上げます。簡単でございますけれども私の挨拶とさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

【観光振興課長（関）】 では、続いて、平尾会長様からご挨拶を頂戴したいと思います。

【平尾会長】 どうも、皆さん、こんにちは。

前回6月25日に、一応中間取りまとめということで、今までの議論の、皆さんから出していただいたいろんな提案を整理するような形でお示しをいたしました。実は今日場でこれをさらに答申の形にどんどんやっていこうという思いもあったんですが、委員の中にも、ただこれをどういうふうに答申の形にするのか、それから、皆さん、いろいろ熱い

思いで議論をした結果をどういふふうにならにその中に反映させていくのか、そういったご意見もありまして、最終回では、むしろこういふ素材をどういふ形で整理をしていったらいいのか、その整理の仕方も含めてご相談をして最終答申という形にしていきたいなど、そんなふうになら考えております。

お手元の資料は、そんなことで1つの資料しか出ておりませんが、今日はこの資料に基づいていんな意見交換をしながら、最終答申に盛るべき中身の確認、それから、そのスタイル、それから、今までの議論した中間取りまとめ等の資料等の扱い、こんなところを中心に皆さんとご相談しながら進めてまいりたい、それを受けて最終答申をまとめていきたい、このように考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

**【観光振興課長（関）】** ありがとうございます。

それでは、早速ですけれども、議事に移らせていただきたいと思ひます。

議事の進行については、平尾会長さんからよろしくお願いをいたします。

**【平尾会長】** それじゃ、私のほうで議事を進めさせていただきます。

お手元の議事次第のところになら、議事（1）というところに最終答申に向けての検討というふうに出ております。その資料としては、お手元にある12ページぐらいなペーパーがございます。これに基づいて進めてまいりたいと、こういふふうになら思ひます。

ざっと構成について見ていただきたいんですが、1ページのところは答申書の概要というところがまず出ております。

1ページ、めくってもらって、ページ2のところになら答申書の作成というふうにならなっています。

それから、3ページとずっと行って、4ページのところ、審議会はコロナ禍をどう受け止め、答申書にどう反映するかというのが4ページのところで、2枚ほどございます。

それから、6ページのところ、これは全くまだ未定稿なんですが、素案として、小谷村の観光振興の方向についての答申ということになら、第1部答申書、将来の小谷村への夢多きメッセージという仮のタイトルが出ております。ざっと書いて、星印が出ているところは、まだまだ中身を練っていく必要があるということになら、あえて星印にしてあります。

8ページのところ、第2部、小谷村の現状分析と政策的な取組提案ということになら、これがそれぞれの各委員の発表した中身をまとめた内容にならなっていますが、それぞれかなり密度の濃い発表だったものだから、なかなかこれをまとめるのも骨の折れる作業だったかなというふうになら思ひます。

2部がずっと続いておりまして、12ページのところで、第3部ということで資料編を、観光審議会委員のプレゼン資料ということで、これを最後につけて、どんなやり取りがあったかという議事録の抄録も加えて、それで全体像をつくりたいというのがこの資料の意とするところでございます。

全体の構成が一応そんな形になっております。1ページに戻っていただきまして、あと私のほうでざっと全体像を3つぐらいに分けてご説明して、それで意見交換したいというふうに思います。

1ページのところで、小谷村観光地域づくり審議会、答申書の持つ意味とその骨子についてという副題をつけてございます。

答申書の概要というところなのですが、(1)答申書の位置づけというところをまずご覧ください。

最初のところですので、まず読み上げますと、答申書は未来に向けて村が進めるべき観光振興の基本的な方向性について意見を述べるものであると。それが、令和元年11月25日の諮問の中身になっています。

2番目のぼつなのですが、当審議会は村長の諮問に答申すべく設置された外部から意見具申する中立的な諮問機関であると、これが審議会の立ち位置でございます。したがって、審議会答申はその諮問に応える観光地域づくりについての提言であり、村の政策的対応を拘束するものではなく、提案内容を政策にどのように反映させるかは小谷村の責任においてなされなければならないということ、通常の審議会のスタイルです。

その次のぼつ、しかし、審議会委員の真摯な意見交換、意見具申の成果である本答申書は、村理事者側、議会側、ともに誠意をもって受け止め、尊重されなければならない。

最後に、この答申書を踏まえて小谷村は観光振興ビジョンを明らかにし、検討委員会等で具体的な取組を検討し、推進することが求められるということで、我々は公式な審議会は7回ということだったんですが、準備会等々を含めて、あるいは、議員、審議会のメンバーの有志が集まって議論すること等々を含めると、二十数回に及んだ議論の積み重ねがあったということでございます。それをぜひともしっかりと受け止めて将来の小谷村のために活かしてほしい、具体的なサービスの取組等については検討委員会等でさらにそれを練っていただきたいということ、これが今回の観光地域づくり審議会の答申上の位置づけということになるかと、こういうふうに思います。

(2)のところ、答申に向けた審議会の経過をまとめてございます。

審議会の構成、委員構成ということなのですが、通常の委員構成と異なり、外部有識者5名、それから、地元委員5名（女性委員が2名）ということで、小谷村を取り巻く状況を外部からの的確に指摘する委員と、それを地元の視点からどのように受け止めるか、そのような意図を持って審議会委員の構成がなされたということでございます。

②のところ、審議会の進め方ということなのですが、審議会は、今日もたくさんの方がお集まりになっておりますが、原則公開で行い、各委員からの現状分析、提言などの報告を基に議論を進め、併せてゲストスピーカーからの提案、問題提起を頂いた。先ほどもちょっと触れましたけれども、準備委員会を含めて7回の審議会を開催したが、審議会の場のみならず、委員有志が時間とスケジュールの調整、可能な範囲でおよそ20回の意見交換の場を持ち、審議会を補完する議論を続けてきた。そのような意見交換の過程で、外部有識者委員はその専門性を十分生かした報告を、地元委員は小谷村での暮らしに根づいた実感のこもった報告を、相手の意見に耳を傾けながら全ての委員が共有することができた。また、審議会からの呼びかけで小谷村議会との意見交換の場を持つことができたのは、今後の小谷村村民への浸透を図るに当たって大きなはずみになるものと思われるということで、そういうことでこの審議会を続けてきたということでございます。

2ページのところをご覧頂いて、じゃ、そういう審議会の答申の持つ意味合いをここでもう一度確認しておきたいということです。この答申書の持つ意味を考えるには、今回の答申書がどのような議論の中で、どのような思いを持って作成されたかを確認しておく必要がある。答申に向けた検討テーマということで、外部有識者はその専門性を活かし、地元委員は地元の生活感覚に基づいて、それぞれの委員のオリジナルな視点から報告してもらい、それについて意見交換を行った。このオリジナルという言い方は、我々外部委員もそうだし、地元の委員さんもそれぞれほんとうに自分の視点で報告をされたということで、そういう意味では、外部からの視点も地元の視点も、ほんとうに右のものを左に持ってきて報告するというのではなくて、小谷村という村を想定してきちっと報告した、そういう場ではなかったかなというふうに思います。

各委員の報告テーマということなのですが、まず、順番としては、外部委員がそれぞれ30分から40分ぐらい、一人ずつ話をして議論をするというスタイルで続けてまいりました。小谷村観光地域づくりの方向性、これは扇田委員、それから、インバウンド対応の観光行動の現状分析評価ということ、これは田口委員、それから、小谷村の経済フレームの分析評価、これは私が担当しました。それから、里山——これは英語のSATOYAMA

Aも併せて——を地域づくりに活かす、これは高山委員、それから、小谷的ルーラリズムについてということで、これは武者先生、それから、地元委員の先頭バッターがゆきわり草の運営から見える小谷村の良さについて、これは藤原委員、小谷村の観光の現状と新しい取組について、これは深澤委員、それから、緑と雪と温泉のふるさとの小谷村の魅力について、これは田原委員、それから、人々の思い、キーワードは労働人口と事業規模、これは今井委員、小谷村のスキー観光の歴史についてということで猪股委員ということで、それぞれの委員が自分の視点で報告をし、それに基づいて議論を積み上げてきたと、1時間半から2時間ぐらいの議論を続けてきたということでございます。

それから、地元観光事業者からのヒアリングということで、これは第5回目の審議会にこのお二方をお招きしてお話を聞くということで、スキー場の歴史と索道事業の運営についてということで栗田さん、それから、山田旅館の歴史と豪雪地帯の暮らしについてということで、これは山田さんということで、地元の方々、どちらかというと南のスキー場と、それから、北の小谷温泉というような、2つの視点で見た小谷の観光の在り方、こんなお話を頂いたと、そういうことでございます。

こういう経過だけ見ていただいても、多方面から議論がなされたということはご理解頂けるのではないかなというふうに思います。

それを受けて、この答申書がどんな意味を持つのかということなんですが、答申書の策定に当たって議論は何をもたらしたかということで②のところですね。小谷村は、地理的にも、歴史的にも、生活、文化の視点からも、極めて多面的であったと。テーマごとに意見交換を積み上げていくうち、委員の胸に去来するのは、小谷村とは何か、その中で何を選び、何を後世に残すのかという問いでもあった。準備期間から約1年に及ぶ審議会の活発な議論をもたらしてくれたのは、次の世代、また、その次の世代に受け継がれるべき将来の小谷村への夢のあるメッセージであるということ、いろんな情報を共有する中で、小谷村って一体どういうことなんだろう、それぞれの委員の中のイメージをつかみながら、結局、こういう小谷村のもっといいところ、もっと可能性のあるものを次の世代のためのメッセージとしてしっかりこの場で残しておこうということで、多分、共通認識が得られたのではないかなと、そんなふうに考えております。

というのがこの答申書の概要ということです。ここで区切って、こんな位置づけで皆さんと議論してきたということについての、いや、こういうこともあるだろう、あるいは、これを付け加えたほうがいいだろうということがもしあれば、議論をしていきたいなと思

いますが、どうでしょうか、こんなまとめでよろしいですかね。どうですかね、よろしいですかね。

一応、そういう位置づけ、答申書の過程も踏まえて、そんな答申書だということを一応ここで確認をしておきたいということですので、まずはそこは一応ご理解頂いたということとお願いいたします。

それで、次のところなんです、具体的に答申書の中身をどうしていくかということなんです、これは若干私の主観と希望を入れてまとめた内容になっていますので、この辺は皆さんの意見をまた出していただいて、最終的には村民の方々に理解してもらおうというのが一番大事なことなので、理解しやすい体裁って一体どんなものかということがあるだろうと思いますので、その辺も踏まえてご検討頂きたいなというふうに思います。

2ページの下のほうにある答申書の作成というところです。

答申書の構成というところについては、以下の①から③をもって答申書とし、ちょっと分量が多くなっちゃったんですが、150ページぐらいって書いたんですが、150ページぐらいのボリュームを想定すると。

①のところが答申というので10ページぐらいにまとめたい。答申の中身を、次の3ページを見ていただいて、審議会の内容ということで、とにかく誰が参加したのかということと、いつ、どういうテーマで審議会が開催されたのかという審議会の過程について、この辺を2ページぐらい、それから、答申の概要をコンパクトに1ページぐらいにまとめて、答申の内容として先ほど言った将来の小谷村への夢多きメッセージ、これが7ページぐらいにまとめて、トータルで10ページぐらいというようなこと。

それから、②のところは、項目ごとの現状分析と政策的な取組み提案。これの中身は何かというと、先ほどちょっと申し上げた中間取りまとめ、全体で55ページもあるものですから、55ページ全部というわけにはいかないの、もうちょっとコンパクトに、スリムにしながら分かりやすくして整理をしていきたい。項目ごとの政策的なアプローチ、それから、組織対応、仕組みづくりについての提案、それから、組織づくりや仕組みづくりについては、今回の議論、どちらかといえば現状分析的なところがあつたかなというふうに思うんですが、政策的なところについても補足可能な範囲でそこに加えて、可能な範囲で政策的な視点も盛り込んでいくよということ、これで大体40ページぐらいになるかなというふうに見積もっている。

それから、③のところ、資料編として、委員のプレゼン資料100ページって書いてあ

りますが、私、それぞれのパワーポイント版をA4、1枚、縦に2シート並べて、全員のパワーポイントがどのくらいになったか見てみると、79ページになっていました。パワーポイント版だとその倍になりますので150ページぐらいになっちゃいますけれども、1ページに2つ入れると大体79ページということで、そこに議事録でどういうやり取りをしたかということについては抄録のような形で、それも付け加えると各委員の思いがはっきりと伝わってくるかなと。大体そんなところを入れると100ページぐらいになるというようなことであります。そんな具体的な答申書の構成。

それから、(2)のところについては、答申書の執筆、これだけの素材がありますので、取りかかれば1週間2週間の作業で何とかなるかなというふうに思っておりますが、専門的な立場でコメントする、執筆するということになると、今回の委員の専門分野については分担執筆のようなことをお願いしたいなと。それから、全体の取りまとめ、追加調整等は、会長の立場で私が担当をしていきたいなというようなこと、それから、最終答申については、8月の下旬ぐらいでめどをつけて答申書を作成したいなというようなことを考えております。

(3)のところ、答申書の記述内容というところなんですが、第1部、第2部、第3部と3つに分けておまして、第1部が答申書、答申の概要、答申の内容、審議会の概要、それから、第2部が小谷村の現状分析と政策的な取組提案ということで、これは整理の過程で若干変わってくる可能性もあるし、内容が増えてくる可能性もあるかなと。このタイトル、項目も変わってくる可能性もあるかなというふうに思いますが、コロナ禍を越えてとか、それから、小谷村の課題とその解決に向けてとか、あるいは、観光地域づくりを進めるためにとか、政策的なアプローチ、それから、組織対応、仕組みづくりについての提案とか、その他もろもろエトセトラというふうになってはいますが、このところはもう少し、またまとめる過程で議論をする場面も必要になるかなというふうに思いますが、その辺は私のところで調整をして第2部を作成したいなというふうに考えています。

第3部は、先ほど申し上げた各委員のプレゼン資料をここに入れるということを考えていきたいなということで、先ほどの審議会の概要の後、答申書の概要ということ、それから、答申書の中身、作成及び全体のスタイル、そんなところをこんなふうに考えていきたいなというふうに思っておりますが、この項目の答申書の作成の辺りでどうでしょうか。ご意見があれば。専門性が高いというふうに私が勝手に書きましたけど、どうでしょうか、この辺のところは。

高山委員はどうでしょうか、この辺の、大体3部構成で、ボリューム感はこんな感じという。

【高山委員】 3ページの(3)の答申書の記述内容のところですけど、第1部が答申書とありますけれども、1、2、3部を合わせて全体が答申書ということでよろしいですね。

【平尾会長】 そうですね。

【高山委員】 第1部は、その中でも答申ということですね。

【平尾会長】 書き方、全体が答申書なんですけど、もっとコンパクトにまとめたのが第1部、もう少し答申書の背景にこういう現状分析と政策的な取組課題とか、それから、最後は資料編というような形で、これ全部が答申書ということですね。

【高山委員】 分かりました。第1部の答申のところなんですけれども、審議会の概要で委員名簿とか、その辺は逆に資料編でもいいかなという気がしました。それはお任せいたします。

【平尾会長】 ほかはどうですか。こんなに分厚くする必要はあるのかとか、そういう話は。こんなに分厚いのがあったら、数十ページでいいんじゃないかとか、そんな意見はありますか？

扇田さん、どうですか。

【扇田委員】 これの編成とか、そういうことについては、基本的には問題はないというふうに思っております。

あと、後半でちょっと細かいことが幾つかありますので、それは後ほどということで。

【平尾会長】 あと地元委員の方々に、藤原さん、どうでしょう。

【藤原委員】 分厚いものになってしまうのかもしれないんですけど、皆さんが一生懸命議論した内容なので、載せてもらったほうがいいんじゃないかなというふうに思います。

【平尾会長】 ほかはいかがでしょう。

今井さん、いかがですか。

【今井委員】 いいんじゃないですか。

【平尾会長】 よろしいですか。

猪股さん、いかがですか。

【猪股委員】 いいです。

【平尾会長】 よろしいですか。

それじゃ、私も皆さんの熱意のあるそれぞれの会の資料は非常に貴重な資料だと思いますし、オリジナルな視点での報告ということでもありましたので、ぜひ形に残して、できるだけ多くの小谷の村民の方々にも見ていただきたいというふうに思いますので、これはまた事務局にまとめてもらうんですけど、事務局が大変かもしれませんが、それはしっかりまた、ぜひお願いしたいと思います。

じゃ、スタイルも大体、答申書の概要と、それから、こんなスタイル、ボリューム感で何とかまとめていきたいというふうに思いますが、そんなことで一応ご了解頂いたということに進めさせていただきます。

あと4ページのところを見ていただきたいんですが、今回の審議会で全く予期しない事態が起こったというのがコロナでありました。私はコロナについて、いろんな考え方があろうと思うんですけど、仮に、この答申書がまとまってから、これだけのコロナ禍に覆われたとすれば、それ前に作ったものというのはまた振出しに戻るくらいの大きな影響を受けるだろうというふうに思います。そういう点では、昨年、取り組み始めて、まとめる段階になったところで、しばらくこの審議会も休止という形になったわけなんですけど、休止の間に冷静に物を考えながら、今、自分たちを取り巻くコロナ禍というのがどんな影響を及ぼすのか、その中で、昨年、現状をこんなふうに考えているんだということ議論したことがこのコロナの影響でどういうふうに変っていくのかと、それを考える時期にまとめる段階がちょうど来たということであれば、当然、審議会はコロナをどう受け止めて、今までの、昨年の議論をどういうふうに変えながら答申書に反映していくかということをはっきりと受け止めておく必要があるだろうということだろうと思います。

ですから、4のところのコロナの受け止め方というのは、今後の、未来の小谷村を考えると、非常に大きなインパクトを持って我々の議論を誘導したというふうに言ってもいいのではないかなというふうに思います。そういう意味では、報告書がまとまる前に、本来の姿を分析した後にこの影響があって、そこでどうしようかという議論ができたということであれば、不幸中の幸いではなかったかなと、そんなふうに考えております。

それはどう中に入れるかということについて、4ページと5ページにまとめてあります。これは6月25日のペーパーに基づくものであります。

(1)の基本認識というところなんですけど、コロナ禍に見舞われる、その前と後では観光地域づくりの展望は大きく変化したよということ、これはよく言われているように、新しい生活様式が観光の地域づくりにとって不可欠だよという視点、これが一番大事な基本

認識ということになるのかなと、こういうふうに思います。

(2) のところは、コロナ禍による方向転換ということなんですが、クラスター、クラスターというふうに盛んに言われております。これも3密ということがイコールクラスターということなんですが、もともとクラスターというのはブドウの房のことで、豊穡な実りを意味した語源があって、それがクラスターなんですが、どうもそうではなくて、悪の巣窟のような扱いをこのクラスターが受けるようになった。これが人々の記憶にどうとどまって、今後の行動をどう変えるのかと。過度に集まることを避けた生活であったり、働き方、人との関係、取引構造、こういうものがみんな過度にならないようにという行動の制約を受けるような時代になってきた。密になれば生産性が上がると言ったのとは全く真逆の状況が出現したよと、これが(2)のところですよ。

じゃ、どういうふうに価値観が変わったのかという(3)のところなんですが、4つの変化、方向があるだろうということで、会社や所属、組織主体の考え方から、自分とか家族とか仲間主体の価値観へ変わっただろうと。時間や場所に拘束されない働き方とか生き方がどんどんできるようになってきた。持続可能性を重視するような社会になってきた。高まる地方への関心ということが言えるということだろうというふうに思います。ですから、未来の小谷村の姿を考えるときには、やはりこういう変化の方向を踏まえた将来像が必要になってくるだろうというふうに思います。

それから、(4)のところなんですが、これは、コロナであるかないかにかかわらず、各委員の指摘にもこの辺のところは色濃く出ておりましたけれども、従来の観光から変わりつつあるんだけど、コロナがそれをさらに加速したよという、そういう認識ですね。従来の観光からプラスアルファの発想へということで、気候だとか、自然だとか、食だとか、文化だとか、こういう単品のもを扱う観光から、ビジネスと観光であったり、健康と観光であったり、教育と観光であったり、要するに、プラスアルファの部分と複合的に新しい楽しみ方、時間の過ごし方が必要になってくると。これこそコロナ禍の中での価値観の変化がさらにそれを加速するだろうということだろうと思います。ですから、バケーションからワーケーションへというような言葉や、定住からサテライトオフィスへという、そういう言葉や、そういう新しいプラスアルファすることが観光の姿に変わっていくだろうというのが(4)の認識です。

(5) のところは、これも前回触れた点ではあるんですが、やっぱり短期的な問題と中長期的な問題を分ける必要があるだろうということで、今、観光事業者の方々にとってみ

れば、生きるか死ぬかくらい、せっぱ詰まったような状況になっているだろうと。短期的に何をするか、これは地域社会の崩壊を食い止めるということがまず第一だろうというのが短期的な認識です。観光事業者をはじめ、地元経済の維持、存続に向けて政策的対応を尽くすこと、それから、感染症対策に関するガイドライン等、ウイズコロナの体制を整えること、短期的には待ったなしにこの2つはやっていく必要があるだろうということ。

それから、中長期的な対応はどうかというと、中長期的に何をするか、目指す方向を示し、小谷村村民みんなの力を結集する仕組みをつくることが不可欠だよと、これがまさに本審議会のミッションであるわけです。地域に暮らす人がデータによって対話し、当事者として行動する仕組みや仕掛けをつくること、これはある委員の言葉をここに使ったんですけど、任せて文句を垂れるなということから、引き受けて考え実行する、こういうふうな仕組みをつくったり、あるいは仕掛けをつくったりしながら、小谷村の文化的な原点を確認しつつ変革をしていくということ、これが中長期的な役割ではないかなというふうに思います。

それから、(6)のところ、答申書にどう向き合うかということなんですが、基本は、先ほどの基本認識のところがありましたけれども、アフターコロナの時代に、いいものを時代に対応するものに変えていながら本質を守ることが大事だねということ、抽象的ではあるんですが、いいものがたくさんあるというのが小谷村の姿だということはよく分かりました。その本質はどこかということもおぼろげながら分かってまいりました。それをやはり大事に守っていくということがこれから重要になってきて、それが次の世代へのメッセージになっていくんだらうということなんです。

答申書の活用としては4つほど挙げてあります。

答申書の作成過程で議論したことを多くの住民、観光、及び他の事業者、議会、行政で共有すること。

データを確認して対話をオープンに積み上げること、これは経験と勘とムラ社会の施策からの脱却を意味すると。今までこうだったらいいよというのではなくて、ほんとうにそうなのかというデータも見た上で、いろんな意見を戦わしながら、じゃ、これでやろうという意思決定をしていくと。

③のところ、小谷村がどんな方向に舵を切ろうとしているか、住民が立ち会える機会を設けること。

それから、④が答申書は将来の小谷村へのメッセージであり、その方向に従って住民に

も、行政にも、議会にも、事業者にも、当事者として自らの手で推進する仕組みと組織を構築していくことが求められるものであるというふうに最後は締めくくっております。

というのがこの前半の議論を踏まえて、コロナを迎え、それが将来の小谷にどういうふうに反映させていったらいいのか、反映させる方向をここにまとめたということでございます。以上が答申書の最後、コロナをどういうふうに受け止めるかということ踏まえてまとめましょうということです。それが今、申し上げた最後の2ページというところです。

というところなんです、どうでしょうかね。皆さんのほうで、いや、こういう視点も大きな要素としてあるんじゃないかとか、その辺があればお願いします。

武者先生、前回、ご都合がつかなくてご欠席だったんですけど、こんな感じで最終答申というようなことで考えておりますが、ご意見があればお願いします。

**【武者委員】** すみません、前回、出ていなくてついていけないところもあるんですけども、大事なのは、やはりいかに住民の方と共有していくかということですね。もちろん答申書というものは一つ、それがベースになるわけですけども、例えば、先ほどの議論とも関係するんですが、答申書、普通、大体行政の文書というのは概要版というのが別途出ますよね、少ない。そういうような形で、概要版でなくてもいいんですけども、もう少し見えやすい形で、例えば、言ってみれば、いろんなメディアを使って動画のような形で我々の考えをテレビにするですとか、いろんなやり方がいいと思うんですけど、とにかく住民に届く形でこれを作っていくということが一つ、大事かなと。

それは、最後に書いてある対話をオープンに積み上げることだと思うんですけども、必要であれば、各委員が住民の皆さんとの対話、車座的なものを例えばやっていくとか、そんなような形の作業が少し必要なのかなという感じはしました。

取りあえず、以上です。

**【平尾会長】** ありがとうございます。

これを受けて、どういうふうに、その後の皆さんとの対話をしていくかということについては、これは村当局とも相談しながら、あるいは議会の皆さんとも相談しながら、適切な対応でまたやっていければなど、こんなふうに思っています。

どうでしょうか。私が一方的にしゃべっていてもいけないので。

田原さん、どうでしょう、大体こんな形でまとめることについては。

**【田原委員】** 個人的には、自分たちの地元委員の意見がありましたですよね。あのときのプレゼンというか、もう少し言いたいというか、加筆というか、そういうのがあれば

やらせてもらえるものかなとは思っているんですけど。言うことがおかしいですか。

【平尾会長】 いやいや、それはまとめる過程で、また、逆にご相談しなきゃいけない場面も多分あると思いますので、その中で、逆に、最後の第2部のところになると思うんですけど、あれについては、大体こんな方向でまとめて、皆さんの意見もこういうことですよねなんて確認しながらやっていきたいなと思っているので、実は、あそこでの趣旨はこういう趣旨なので、もうちょっと分かりやすく、こんな別の例で説明したほうが分かりやすかったかもしれませんというのがあれば、またその辺は教えてもらいます。

【田原委員】 ありがとうございます。そのとおりなので、多分、ここの地元委員の方もあると思いますので、ぜひ聞いていただければ。よろしくお願いします。

【平尾会長】 田口さん、いかがですか。

【田口委員】 全体としては特に問題ないんですけども、ちょっと気になるのはコロナの話ですね。今現在も進行形といいますか、政策的にも国がどうなのか、あんまり態度がはっきりしませんけれども、我々が答申を作った時点におけるコロナの状況を何かデータの的につけられたら、例えば、新型コロナ以外に何か新しい感染症なりウイルスが出てきたときに、あのときこういう議論をしてこうだったねって、将来的な参考になるんじゃないかなとふと思ったんですね。現状のコロナ、こういう状況の中でこういう答申をしましたと、バックアップデータとしてこんなものがありますよみたいな、何かつくれたらいいのかなという、ちょっと抽象的で申し訳ないんですけど、何かそういうのがあったらいいのかなと、ふと思いました。

【平尾会長】 まだ実は、コロナ後といっても、コロナが終わっているわけでもないの、どうなるんだろうって思いながら、今、進めている。ただ、コロナが始まる前と始まってしまってからでは大違いだよということなので、取組でしっかりと後世に、あのときこういう取組が功を奏したよというところまでうまく結果が出ればいいでしょうけど、なかなかそこはどうかという感じで、そこはまとめ方の中でまたご相談させていただければと思います。

深澤さん、どうですか。

【深澤委員】 答申書の内容については、とてもいいのではないかと思うんですけども、多くの住民の皆さんに共有してもらうためには、やっぱり150ページのボリュームで、こういう字ばかりの難しい内容かなというふうに思われたら、立派な装丁になっていても、村全員に配ったりとかしても、なかなか皆さん、読んでもらえないんじゃないか

など思うので、そうすると、とっても興味のある人とか、事業者の人とかはしっかり読んでくださるけれども、読んだりが苦手な人とか、ちょっと忙しい人とかには届かないのではないかなと思ったので、先ほど武者先生がおっしゃったみたいに、もう少しとつきやすいような普及版みたいな簡単なバージョンのものも作って、資料とかはなしでも、骨子について簡単に理解できるような普及版みたいなものがあれば、中学生とか、高校生とか、学生さんとかにも伝えられたりとか、字を読むのが苦手な方にも伝えられるのではないかなと思いました。

【平尾会長】      ありがとうございます。

多分、そういうご意見を頂くことになるだろうなというふうには思っていたんですが、普及版とか概要版というのは、例えば、1部、2部、3部があるときに、1部だけがほんとうに概要版、それだけだと文章ばかりなので、何とも真っ黒な感じの紙を見るだけで面白くないなということであれば、その中に第2部の、さらに厳選したグラフとか写真とか、そういうものを入れて、第1部プラス第2部の一部みたいな形での概要版というものも必要になった、大体、概要版のイメージ、そんな感じですよ。そうですね。そうすると、答申の最初の10ページプラス20ページを入れて、25、6ページから30ページぐらいのものが概要版になるみたいな、そんな感じですかね。あとは3つの部を多分どう料理するかという話にきつとなると思う。それは適宜、また、できるかなと。

この150ページ、このまま作って、それだけということではないんだろうと思っています。その辺はまた、印刷費用とか、そういうこともきつと絡んでいくと思います。十分その辺は承知をしております。

【武者委員】      私、先ほど、動画って言ったのは幾つか理由がありまして、1つは、今、大学がコロナでこういう状況で、全部、我々、授業をオンラインで動画に変換して配信しているんですね。そうすると、ふだん教科書を解説する授業もあるわけですが、教科書よりも動画で見たほうが学生は各段に分かりやすいと言うんですよ、同じ内容を言っているだけなんですけどね。

そういう意味でも、特に若い世代に対して、非常に普及するのかなというのが1つと、もう一つ、私、委員会が終わった後、専門員の先生方と後でお話をしたりするわけですが、そのときの、例えば、田口さんと扇田さんの会話なんかを聞いていると、非常に面白いわけですね。参考になるんですね。こういうオフィシャルな場じゃなくて、ちょっとオフレコ的に座談会をしているようなところを聞いたほうが、実は伝わり安いな

いかなって、そんなことも少し思っ、先ほどそういうことを申し上げました。

【平尾会長】 扇田さん、お願いします。

【扇田委員】 今、深澤さんがおっしゃったように、武者先生がおっしゃったこと、大変よく分かるし、それは全くそのとおりのんですが、僕は、こういう答申書をこれまで幾つも作ったり、それがそのままぼいと深くどこかに眠ってしまう場面だとか、それがうまくきちっと活用されている場面とか、いろいろ見てきたんですが、1つは、こういうものはある程度抽象的にならざるを得ないんですけれども、これを読む人たちは、少なくとも事業者であり、現に仕事をしている方たちで、その中でいろいろな壁に突き当たったり、疑問に思ったり、ここはどうしたらいいんだろうかというのを日々悩まれている方たちが実はこれの主な読者であり、指針になるものだと思うんですね。

ですから、重要なことは、そういうときに、あ、これがそういうことだったのか、じゃ、それを自分の今、悩んでいる事業のことや、これからの未来については、これなんだな、こういうことなんだ、つまり、個別具体論を自分の中ではっと気づかせるような内容であることが僕はまず重要だと思うんですね。つまり、全然仕事も何も全くしていない方たちに、はい、教科書です、はい、何ページを開いて、どういうふうにやってくださいというものとは若干僕は違うと思っているんですね。

ですから、その辺をかみ砕いて易しく出すということと同時に、あえてそこを無視して、考えるところはおまえらが考えるんだと、あなたたちが引き出すんだという突き放した部分と、どういうふうに持っていくか、これが実はこういう答申書の大事なところで、ふだん、時々ありますよね、俺は字が読めないから読まない、何を言っているか教えろって言って、教えるとそのとおりのことしか言わない、そういう人たちは一旦消えてもらって僕はいいぐらいのことで思っているわけです。

そして、その人たちが消えたけど、よくみんなが動いているのを見たら、ああ、こういうことだったのか、じゃ、俺もそこに入って行って、俺だって何かしゃべれるぞ、俺だって何かやれるぞというような役割をすることが実はこれの答申書の大事なところで、教科書ではないんだというふうに僕はちょっとあえて申し上げたいというふうに思います。

【平尾会長】 その辺、なかなか難しいところだろうなというふうには思うんですが、実際、事業をやっている方々の現場で、なるほど、そういうことなのかというくらいな答申書を逆に審議会が提出しなかったら、この程度のもので別段、事業にはかすりもしないよなんて言われかねない部分もやっぱりあるので、これはひとえに審議会の議論がどの程

度のもだったかということ逆を突きつけられているようなところもあるので、深いところまで我々も議論しながら、それを提示したいなというふうに思いますが、やっぱり入り口のところは間口を広げて、しかるべき人たちにもきちっと届くような、そういう欲張った内容で、できれば。

分厚いところは分厚く全部押さえながら、ポイントを押さえて普及版のような形で対応していくということかなというふうに思っていますが、またその辺は各委員さんと相談しながら、トーンを合わせながらやっていきたいなというふうに思いますが、先ほどの武者先生のお話は、一つのコロナ後の動きを審議会そのものがどう受け止めていくかということにもつながってくるんだと思うので、それを普及するために、はい、パンフレットですよということがいいのか、あるいは、ほんとうにYouTubeのようにアップするようなくらいな感じで、あるいはケーブルテレビに映像として乗っけるような、そういうことも大事なことだろうなというふうに思っていますので、それも、最終的には普及過程でどういう工夫をしていくかということもまた検討していきたいなというふうに。

高山委員、お願いします。

**【高山委員】** 普及にちょっと関係するんですけども、観光振興づくりを進めていくためには、当事者である事業者の方だけではなくて、小谷村の住民の方々も含めて、応援して下さる全ての方々にこの答申が届かなきゃいけないくて、次のステップとして、観光振興ビジョンがあって、それから具体的な政策が出てくると思いますが、一番基本となる答申ですので、これは具体的にどういうふうにするかってあれですけども、例えばですが、目の見えない方もいらっしゃる、耳の聞こえない方もいらっしゃる、ご高齢になって、なかなかこういう情報にアクセスできないような方もいらっしゃる、そんな方々も全部含めてフォローしているんだよということを小谷村が見せると、さらにこの答申の力強さというのにも出てくるなと思っております。よくユニバーサルデザインなんて言いますが、全ての方々に同じように、いろんな形で情報が届くということを小谷村がやっているんだ、目指しているんだという、そういう姿勢をみせれば、それも一つの観光振興の大きな目玉になるなと思っております。

以上です。

**【平尾会長】** ありがとうございます。

ほかはどうでしょうかね。

それでは、答申書の概要、それから、答申書の作成、それから、コロナ後ということ

どう組み込んでいくかという3つに分けて、今、いろいろご意見を頂きました。全体のスタイルとしては、大筋、一応了解を頂いたかなと、こういうふうに思います。コロナについては、過去形で語る状況に今ないので、まだウイズコロナということで何をやり始めて、それがウイズコロナという言葉にちょうどフィットするというようなことで将来的に評価してもらえるのかどうなのか、そういう扱い方に多分なっていくのかなというふうに思いますが、いずれにしろ、そういうウイズコロナ的なものを中にどういうふうに入れていくかというようなことについて、これは多分、作業過程でまたいろいろ皆さんにご相談しなきゃいけない部分が出てくるかなというふうに思っていますが、一応、その3つの方向についてはご了解頂いたということですのでよろしいですかね。

ということで、そうすると、あと6ページ以降の未定稿って書いてあって、一応、ここにそれらしく書いてはありますが、これはまだまだほんとうにまとまっていないものであるので、逆に、答申書の中で第1部に、本来、このところだけは将来の小谷村への夢多きメッセージということ考えたときに、もう一度、これは繰り返してもいいので、皆さんの立場で、この点だけはぜひともしっかりと答申の項目の中に入れておいてほしい、入れるべきだ、あるいは、報告会ではあえてそのところまでは踏み込まなかったけれども、今考えてみると、かなりこの点が必要なんじゃないかというようなことがあれば、この辺で、むしろ答申書の第1部の心臓部である答申書のさらに項目として、これだけは未来へのメッセージとしてぜひ入れておきたいというのがあれば、その辺をいろいろご意見なり、意見交換できればなというふうに思っていますが。

この6ページの中身について、今見ていただく必要は全くありませんので、むしろ、5、6ページの夢多きメッセージというところで小谷村の将来の子供たち、あるいは孫の世代まで含めて、何を、こういうことを伝えたいのかということを経済審議会でもう一度確認できればなというふうに思っておりますので、どうでしょうか。もし発言がなければ、私が勝手に当てますので、当てられるのが嫌な人は最初に口火を切って。

扇田さん、お願いします。

**【扇田委員】** 1つは、これから小谷村がどういう形で観光振興に関わっていくのか、それで、ここでずっと意見が出ていたのは、観光というのは従来の意味での狭義の意味での観光ではなく、あらゆる産業を下支えする、もしくは、あらゆる産業の上部にあって、それが一つずつ全部あれているんだという意見はここでほとんど例外なく一致したと思うんですね。

ところが、これは国、それから、県、それがあるので、相変わらず観光課という課があって、それで、観光課の職員が観光を運営していくというような形で、林業課やそれ以外の方たちは、それは、おまえ、俺たち関係ねえよと、俺は田んぼだけのあれをやっているんだとか、道路だけ、建設だけやっているんだとか、商工組合でこうだという形になっちゃっているわけですね。ですから、幾らそういうふうにしても、結局は観光という、もしくは、観光課が動く、観光係が動くという状況から一步も前に出ない。それ以外の人たちは、役場の職員も含めてですが、それは俺の関係の部署じゃないというやり方で今まで来ているのではないか。おそらくこれからもそうなるのではないかというような気がするわけです。

そういった意味で、特に小谷村のように、要するに、小さな村単位で、役場の職員も十分にいるわけではないわけですし、そういう中で、これだけ膨大な観光に関わる、広義の観光に関わる事業を村として、これをどのように遂行していかなくやいけないのかという意味において、組織の在り方を僕は根本的に考えていかなくやいけない、もしくは、作り変えていく時期に、このコロナの時期の2年間で、2年だか3年だか分かりませんが、やっていく時期に来ているのではないかというような形で、こんなのは理想的かもしれませんが、観光課長とその次のまとめ役の方はいるとして、しかし、この議題とこの問題をやる時は建設課と教育委員会とこういうグループを合わせて一つの会議体を持っていかなくやいけないというような形で、村長、もしくは村長さんなんかと当該課長さんの動きの中で、それを臨機応変にしていく、そういうような組織の在り方というのは、逆に、こういう小さな村だからこそ、縦割りでない、ほんとうの意味での横割り、斜め割りの組織形態というのをつくっていただけるんだと思うし、また、いかなくや、とてもじゃないけど回し切れないような気がするというのが1つです。

それから、もう一つは、今のそういう観光の時代にあって、相変わらず観光協会だとか何とかというと、ほとんどがかつてやっていた観光のオーソリティーみたいな人が相変わらずそこで集まって、声も大きいと言っちゃ大変失礼で語弊がありますがけれども、そっちになっていく。しかし、重要なことは、それはそれとして、非常に1人の、もしくは、1団体の持っているものをリスペクトして、きちっと取り入れていくということは重要ですが、そこにこれまで観光とは捉えられていなかったような方たちも参画ができて、その方たちがそれぞれにそれぞれの立場から意見が言え、それから、人を、そこに具体的な施策を落とし込んでいくという、僕はそういうことが実は観光委員会とか観光組織には

必要に今なってきたのではないかと思うんですね。

観光について、例えば、スキーにしても、かつてのスキーの在り方と、スキー経営の在り方とこれからのスキーの在り方というのは、やっぱりかなり違ってくるのではないかと。僕なりに、大変僭越ですが、1つ、事例を挙げれば、スキー学校の在り方というのも、例えば、これまでは技術を教えるのがスキー学校だったと思うんですね。ですから、これをゴルフでいえばレッスンプロというのがいるわけです。それから、世界中を転戦して回るプロがいて、レッスンプロがいて、もう一つ、例えば、仮の名前ですけど、エスコートスキー、エスコートレッスンというのがあってもいいと思います。

これはどういうことかということ、例えば、60代とか70代になると、これまでスキー仲間だった人たちが一抜け、二抜け、三抜けして行って、最後まで頑張っていてやっているのは1人だけになっちゃったとか、それから、あそこへ行ってもいいんだけど、全然知っている人がなくて寂しいんだというようなときに、あなたと一緒に、例えば、梅池のどこどこを一緒に滑りましょう、お付き合いいたしますと。お昼は私が非常に大事にしている隠れ家の楽しい秘密の食べる場所があるので、そこでゆっくり食べて、それで、帰りは私の車で一緒に送っていきますよというようなことがあって、1人ないし2人で1日3万とか5万というお金を取っても十分やってくる、また、そういうことを望んでいる人たちというのは意外と数がいるわけです。

そして、そのときに、実は若いときに猪股さんに憧れて僕はいたんですけど、同じ年齢になってよかったですねみたいな話ができるということで、これからの一つのスキー場経営の在り方とか、そういったことで、もちろん過去のことを踏襲することは非常に重要で大事にしなきゃいけないけれども、これから先の新しいスキー経営の在り方、もしくはスキーの在り方、そういったものが今、問われているんじゃないかって。

最後にもう一つ申し上げたいのは、これだけ大きな改革をしようとしていると、絶対に平等にはいかないと思うんです。ここに厚くお金を使う、こっちは、しかし、お金はあまりいきません、あそこの場所にはお金をいっぱい投資します、ですけど、こっちは少し投資ならまだいいけど、一切投資はしませんとか、そういう意味での僕はめり張りをきっちりつけなきゃいけない時期というのが来るのではないかと。

そのときに、めり張りをつけられるのか、つけるためにどれだけの苦しい時期を過ごさなきゃいけないのか、そういったことを僕は理事者の皆さんに望みたいわけです。その辺の覚悟がないと、やはりこの答申案というのは、どんなにあれしても単なるお経読みの文

書になってしまうというふうに思っておりますので、ぜひ、不公平があるんだと、新しいものをつくり上げ、もしくは、古い形のものを衣替えさせるためにはそういうことがあるんだということを肝に銘じてほしいというふうに思っています。長くなりました。

【平尾会長】 ありがとうございます。

行政当局の縦割りから横串を入れるということはよく言われてきていますが、なかなか難しいなど。行政課題が複雑化して、こういうことをすればするほどそういうことが難しくなっているなど。だけど、やらなきゃいけないことですのでということだろうと思えます。

それから、先ほどの経営を変えるということについても、お客さんが誰かということに応じた、新しいお客さんにどういうふうに向き合っていくか、その向き合った先に自分も変えていかなきゃいけないよというところ、これが新しい経営の姿になってくるだろうというようなことも、全くおっしゃるとおりのことかなと思いつつながら。

それから、全部平等は無理だよということについても、めり張りをつけてということも、これも重要なご指摘だというふうに思っていますので、そこはまた今日は村長がいらっしゃっているので、村長にぜひそういう視点でまた予算編成していただけるようお願いしたいと思えます。

【扇田委員】 もう一つだけ。

これは僕もあちこちであれしているんですけど、CATVというものの利用の仕方、これはかつてCATVというのは普通のテレビのあれでは見られなかったんですけど、ほとんど光ケーブルとか一緒になっていけば簡単に見ることができるわけですよ。いろんな理由があるかと思うんですが、このCATVをもっと、どのような形で活用して、村民がふとチャンネルを合わせたらCATVだったと、これを見たいねと思ってやったらという形をこれから先、いろんな人の力を得て、僕、ぜひテレビ局として認知されるやり方というのを、例えば、ここだったら、白馬テレビと大町ケーブルテレビと3か所あるわけで、それを1つでやるとか、いろんな形でCATVというものをもう少し活用する、積極的に活用していく。だから、例えば、これだっらずっと中継していいわけですよ、1時間でも2時間でも。そこでこういうことだったのかというようなことがあって、今は中継というと議会だけですか、大体。ぜひ、CATVの具体的な使い方というものの研究会を立ち上げてやっていただけたらというふうに思えます。

【平尾会長】 それじゃ、次、どうでしょう。今井さん。

【今井委員】 私から、盛っていただけるか、いただけないか、お願いというような形でお話をさせていただきますが、3ページの上から4行目の②に、項目ごとの現状分析と政策的な取組提案というのがございまして、そのぼつの3番目、組織づくりや仕組みづくりについては十分議論を尽くしているわけではないが、可能な範囲で政策的視点から盛り込むという項目がございまして。そして、5ページの上から(5)というので、短期的なこと、中長期的なことを記載すると記載がございまして。なるべくなら、短期的な対応に対する政策視点の盛り込みというのをもうちょっと具体的なものでご提案を頂ければ、村としても動きやすいのではないのかなと感じます。

それで、実はコロナのお土産が1個、私から見るとプレゼントが1つございまして、田口委員さんからメールを頂いたことで、皆さん、見ていると思うんですが、今年度から国際競争力の高いスノーリゾート形成促進事業というものが国土交通省の観光庁から立ち上がっておりまして、6月の頭に締め切られたということで、全国で約2分の1補助ということでございまして、20億円がつかしました。そして、長野県では、18のDMOが採用されて、20億のうちの12億数千万が長野県に来ております。幸いなことに、私ども小谷村が参加しているDMOが白馬相当に関しましては、そのうちの7億2,000万ですかね、補助金がついております。

国際競争力の高いスノーリゾート形成促進事業の内容ですけど、アフタースキー、グリーンシーズンのコンテンツ造成、受入環境の整備、外国人対応可能なインストラクターの確保、二次交通の確保、情報発信、スキー場インフラの整備といった取組を2分の1のお金を出して支援していただけるということで、今年は雪が少なく、雪が多かった47さんが独り勝ちだったわけですが、そんな関係上、スキー場に降雪機を入れたいということで、2分の1補助を頂いて進むという形を取られているところが多いようにお聞きしております。

小谷村のスキー場にはどれだけのものが入るのか、それから下の情報は私には入っていないので未確認でございますが、今年度は20億だったそうですが、しばらく続けたいというお話も聞こえてきておりますので、短期的な経済対策として、もしよろしければ、この委員会のほうからのご提案というか、そういった補助的な支援もあるんだということを一応ご提起頂ければ、今後、進めていく上に大変やりやすいのではなからうかと思えます。

私、プレゼンのときに、小さな会社の集まりですと、小谷村を話したんですけど、ざっくり言って、観光関係では五十数億円しか動いておりませんので、商売をやっていると、

大体5%が次のための、冬のために設備投資をしていかなきゃいけないんだと、その上に3%から5%の利益を出して納税していかなきゃなりませんよというようなお話を聞いておりますので、約3億円ぐらいしか小谷村というのは自力での設備投資ができない、なおかつ、中小企業が少ないような状況でございますので、公的な支援で村民が知恵を出して、お客さんが来ていただける環境づくりというのが大変必要なことかと思っておりますので、情報量は皆さん、すごく多いので、ほんとうは盛っていただけると動きやすいかなという気がいたします。

以上でございます。

【平尾会長】 それは、私の立場でお答えする立場にあるかどうかということはあるんですが、審議会の答申の性格上、どういうふうに扱うかということについてだけ私のほうから申し上げますと、例えば、ここで先ほど答申書の位置づけというところの1ページ目の(1)のところのぼつでいえば一番下のぼつ、この答申書を踏まえて、小谷村は観光振興ビジョンを明らかにし、検討委員会等で具体的な取組を検討し、推進することが求められるということなので、具体的な補助金獲得のためにこういうものがあるから、それについて鋭意、取り組むようにというような意味での文言はなじまないということなんですよね。

ただ、言うべきことは、そういうときに、例えば、中央官庁との幅広いネットワークをつくりながら、そういう情報も小谷村に常に入ってくるような、そういう人間関係をつくることは将来の補助金獲得にとっても非常に有利だし、そういうオープンな環境をつくることが非常に大事だよとか、そういう中で補助金を獲得して、短期的な問題で対処するという、そういうことになろうかというふうに思います。

ですから、今井さんのお気持ちは非常によく分かるんですが、この答申書にはそこまで触れてしまうと、じゃ、ほかの補助金については何で触れないんだとか、教育についての補助金だって、こんなものがあるんじゃないかとか、とにかくいろんなことになってしまう。ただ、そういうものを確実に小谷村が獲得できるような、そういう中央官庁の敏腕課長補佐とやり取りできるくらいなレベルの人間がここに育つような環境をつくる必要があるとか、そういう感度の高い情報網をこの地域で獲得しておかなきゃいけないよとか、そういうことになろうかなというふうに思いますので、若干、今のをストレートに入れるということは難しいかなというふうには思います。

私の立場で一言。そんなことでよろしいですか。

【今井委員】 はい、結構です。

【平尾会長】 ほかはどうでしょう。先ほど、田原さんの本来の趣旨ではない、もっとこういうことが言いたかったんだというようなお話がありましたけど、むしろ、こういうことを言いたかったんだよということであれば、その中身についても、教えていただければなと思います。

【田原委員】 今回の自分の立場的なことと言えば、山岳観光とか、それから、特に、観光開発的な要素がなかった小谷村の姫川から見て東側沿いの方、東側方面と言えば、語弊がありますけれど、その地域の大きな観光事業でなくて、特に都会の方たちにおける非日常的な体験ができる要素、それから、今、こんな状況で厳しいんですけど、インバウンドが復活したときに、その方たちにも日本における田舎というか、農村体験をしてもらうような方向が、特に東側には多くの要素が残っておりますので、そういうのを違う視線で、違う視線というのは、特に、今のスキー観光じゃない方向へも持っていけるんじゃないかと思っていますので、そこらも入れたいというか、やってみていきたいと思っています。

【平尾会長】 ありがとうございます。

ほかはどうでしょうか。

高山さん、どうでしょうかね。

【高山委員】 5ページまでに書かれていることは、僕もこれでいいと思います。先ほども話したとおり、次に村当局が観光振興ビジョンをつくりますので、そこにこういう提言をしたいというので入れるという意味であれば、どこかにあったんですけど、5ページの真ん中辺、中長期的な対応のところですけども、そこに目指す方向性を示しというのがありますので、ぜひ、プレゼンのときに申し上げたとおり、小谷村の観光振興の在り方の将来像ってこんなものだということを観光振興ビジョンで示していただきたいというのは、そういう文言を入れなくてもいいんですけども、そういうものが入っていればありがたいと思います。

【平尾会長】 田口さん、どうでしょう。

【田口委員】 先ほどの田原さんのお話に続くんですけども、小谷に限ったことではないんですけども、観光という、どうしても今までのイメージが狭い観光にとらわれちゃって、それ以外の俺たちは関係ないんだという人が多いんですよ。

それから、もう一つは、今回も思ったんですけども、地元に住んでいる皆さんが地元を知らない。これは小谷だけではありません。全国どこでもそうなんですけれども、住ん

でいる魚に水は見えないとよく言いますけれども、地域のことを皆さんがもうちょっと興味を持って、ましてや、小谷の産業構造を見ますと、観光に直接は関係ない人でも、間接的に観光に関与する方が非常に多いわけですね。ですから、そういう意味で広く観光に関してもうちょっと皆さんが関わるといいますか、思いを持つような、ずっと言っていますけど、観光教育みたいな立場を何かもうちょっとできないかなと、この中にどう書くかは別問題として、感じます。

そこプラスアルファで、デジタル化という部分で、どうしてもこれだけ面積が広くて、それぞれの集落が離れて、なかなかほかの地域のことが分からない状況が多いですから、先ほどCATVの話もありましたけれども、情報をどうやって共有するかというところでもうちょっと何か焦点を絞れないかなというのは個人的に考えています。

特に、先ほども東山のほうから白馬を含めて北アルプスの3つの槍が見える場所というお話をお聞きして、そんなところがあるんだって初めて知りました。そういう地元のよさとか、そういうところをもうちょっと地元の皆さん自身が学んでいただいて、もっとそれをPRできるようなことにできないかなというのをずっと感じていました。その辺を盛り込めたらいいのかなというふうに思いました。

【平尾会長】 そうしたら、ふだんの活動も積極的にやられている藤原さんから。

【藤原委員】 前、原村のお話を聞く機会のときに、住んでよし訪れてよしという、よく聞く言葉だと思うんですけども、観光が観光だけではなくて地域づくりであるということも、会議でもお話が何回か出ていると思うんですけども、先ほど田口さんがおっしゃられているように、住民が自分の村のいいところに気づいて残そうとするということが一番大事なんじゃないかなというふうに思っていて、そこに、田口さんがさっきおっしゃっていたように、地元みんなが気づいていない、私も含めてなんですけれども、そういうことが意外に多いんじゃないかなというふうに感じていまして、前にちょっと思っていたんですけども、例えば、小谷に住んでいる人は、その中での非日常を感じてわくわくすると。訪れた人はそこに住んでいる人の日常を見て癒やしを感じるという言葉が載っていたんですけども、そういうことが観光になるんじゃないかなというふうに感じていまして、今まで、どこかに行って何かをする、テーマパークみたいなのがあって、そこに行くという観光だけではなくて、ここにある日常とか、人とか、自然というものがこれからは観光的な要素になるのではないかなというふうに今までのお話を聞いて感じましたし、観光教育であるとか、あと情報の共有であるとか、そういうものも、ケーブルテレビなど

を使って、住民が考えて実践していくということが大事なのではないかなというふうに感じました。

【平尾会長】 ありがとうございます。

じゃ、猪股委員、いかがでしょうか。

【猪股委員】 お疲れさまです。

委員としてやらせていただく中で、私の実家も宿泊事業者でありますし、なるべく事業者としての現場の意見を皆さんにお伝えできればというふうに取り組んできたところもありますし、一応、村会議員という立場でもご意見を述べさせていただきながら進めてきたんですけど、その立場として、今現在、小谷村に事業所として140軒以上あるんですが、この先、コロナが進んでいますけれども、1軒の倒産する事業者、廃業してもらっては困るという思いで日々観光業を見つめてきているというところがあります。

どうしても今の小谷村の政策的に審議会ありきみたいないところがありますので、この答申を基に観光を立て直していくというようないところが見えますので、ここの答申というのは非常に重要な部分だと感じます。それを踏まえて、行政なり、議会なりでしっかり肉づけをしていくということが大事になってくるんじゃないかなというふうに感じています。

それと、先ほどから出ていますけれども、各事業者は、今、すごい担い手不足なんですね。後継者不足というか、これは多分小谷村だけじゃないとは思いますが、今の若い子たちに観光業というところの魅力が薄れているような気がしますし、先ほどから田口さんや藤原さんの話にありますように、地元の間が地元のよさを知らない、観光業をやっている人たちが観光業の魅力をしっかり把握していないということも一つの問題だと私自身、感じていますので、それというのは、梅池に限って言うと、梅池の人って意外にスキーをしないんですね。スキー部上がりの人間だったりとか、スキー学校関係の人、ここで言えば、僕とか深澤さんはほぼ毎日スキー場にいるんですけど、それ以外の人たちというのはほぼスキーをしないし、スキーを買ったりだとかスキーの道具を毎年楽しみに待つということがないんですね。

それって結構、僕、問題だなと思っていて、一回、村にお願いして、小谷村の小中の子供たちに小谷村の3スキー場のリフト券、シーズン券を出してよという話をしたときには快く快諾していただいて、索道業者の皆さんにも協力頂いて、小谷村の子供たちは小谷村のスキー場は毎日滑ることも可能なというような仕組みをつくってもらったんですけども、できれば、小谷村民全員がそんな仕組みでスキーができる環境をつくってくれる、ス

キーじゃなくてもいいですから、スキー場に来てもらえるというような環境づくりを地元の人たちに推奨するということが大事になってくるんじゃないかなというふうにも感じていますし、観光業をやっているくせに観光地に行かないんですよ。観光をしに行かない。旅行に行かない。家族旅行でもいいので、年に1回はどこかに観光に行くというようなプランを村から発信できるような仕組みをつくれたらなというふうにも考えていますし、ほんとうに観光立村とうたいながら観光地を知らないというのは、なかなかそこで先が見えてこないというのは、観光現場に居ながら常にそれは感じています。

それと、先ほど、一事業者も廃業させたり倒産させたくないという思いがあるという話をしましたけれども、それには、先ほど出ています短期的な経済活動というところも重点を置かないと、ほんとうにこの冬を迎えられないような事業者は実際に多くありますので、そういったところも今後、考えていかなきゃいけないかなというふうには感じていますので、言い出すと切りがないんですけど、そういった提言も答申書の中に含めていただきながら、またそれを村内で考えていく必要があるというふうに感じております。

以上です。

【平尾会長】 扇田さん、お願いします。

【扇田委員】 議論をさせてください、猪股さん。

僕、スキーをしないということと、スキー場へ行かないということは違うことだと思っ  
てほしいね。スキー場はどんどん行ったほうが、冬のスキー場に行って、いろんな遊びを  
し、いろんな風景を見るというのは非常に重要なことだと思いますね。ですけど、先ほど  
来から出ているように、観光というのは非常に幅広い意味を持っているわけです。です  
から、スキーを全くしない人の視点から見たスキー場の在り方とか、それから、逆にスキー  
を知っているからこそ思う、例えば、今は靴はある程度小さくなっていますが、昔みた  
いに重いスキー靴を履いてトイレに入るとき、もしくは、階段を下りたり上ったりする  
ときの階段の歩幅とか、これはスキーをやらない人じゃないと分からないと思うんですね。  
ですから、そういう視点からいかにウェアをトイレでどういうふうに始末してやるかとか、  
そういうことのあれ。

しかし、スキーをしないでゲレンデで遊んだ後に、冷えた体をどういうふうにするか、  
もしくは、スキーをつけないでリフトで上って上の山を見たいんだけど、どうやってその  
人が上からつぼ足というか、そういうことをしないでゲレンデを歩かないで、帰り、ゲレ  
ンデを下りてこられるかとか、いろいろなやり方が出てくると僕は思うんです。

ですから、よく言うのは、大町に住んでいるんだから山の名前ぐらい全部分かかってよく言うんですけど、逆に、分からない人がいて、よそから来た山の好きな人に教えてもらう、そこから一つの交流があっても僕はいいように思っているんです。ですから、スキー場に行かないということの人を僕はある程度責めてもいいと思いますけど、スキーをしない人というのは、逆に、おまえ、じゃ、スキーをしないんだったら、スキーをしない目から、この雪をどう活用できるのか、このゲレンデの在り方をどうできるんだ、その辺を研究してくれよというような相互のやり方があっても僕はいいと思っているんです。

【平尾会長】 それは扇田さんのご意見ということで、それに対して猪股さん、何かあれですか。

【猪股委員】 いや、特にないです、別に。

【平尾会長】 そういう考え。

扇田さんのあれも分かるんですけど、私も長野の出身だと言うと、当然スキーはやるでしょうって言われて、いや、実はあんまりやらないんですよと言うと意外な顔をされるということがあって、地元の人、これは長野も小谷もそうなんでしょうけど、雪に親しんで、それを誇りに思ってもらおうというのは大事なことだとは思うんですよね。

【扇田委員】 だから、スキー場へ行くということが大事なんだ。雪を知ることが大事。

【平尾会長】 だから、小学生が誰でもスキー場に行けるということで雪に触れる機会があって、雪にプライドを持って俺たちにはこんな雪があって、こんなに積もってすばらしいんだって、そういうふうにみんなに思ってもらえるということがとても大事なことだと思うんですよね。

【扇田委員】 もう一つ、1分だけ、お願いします。

スキーのことなんですけれども、大町の子供もそうなんですけど、白馬なんかも僕の知っている範囲ではそうなんですけど、小学校の5年以降になるとぱったりスキーをやらなくなる子が出てくる。というのはどういうことかという、大町にしる白馬にしる、スキーレースに出る選手を育てる、もしくは、そのまねをさせることがスキーを滑ることだというふうになってきて、スキーが下手なんだけど、スキーは楽しいので遊びたいという子供たちがスポイルされていくんです。そうすると、あるときから二度とスキーを履かなくなってしまうという子供が意外と多いんです。

これは山登りもそうです。大町ですと、高校は北アルプスの幾つかのコースを歩くんだ

ということを大人たちはとうとうとよその人たちに自慢するわけですね、これは大町だけのすごさ。だけど、あの登山をするためにものすごい負荷をかけられる子供たちも逆にいて、二度と山は登りたくないという人間も出てくるわけです。

ですから、もしスキーをさせたい、山も登らせたいということがあれば、そういう人たちを、子供たちをどういうふうに保護し、見て、そして、その子供たちがどう楽しめるのかというところまで意識して、スキーを楽しめて、スキーをやることから脱落しない子供を出していく、レースに出なくても、レースでペケでも、急な斜面を滑れなくても、滑降が下手でも、子供たちが滑れる、そういうところまで僕はぜひ猪股さんのようなプロの方たちに気を配ってやってもらいたいというふうに思っています。

【平尾会長】 猪股さん、大体、そんな思いは多分同じだとは思んですけど。

【猪股委員】 はい。

【平尾会長】 何かありますか。

【猪股委員】 今の話で言えば、今、実際にレーシング以外の子供たちを受け入れる仕組みも各スキー場でやっていて、梅池でもありますし、白馬乗鞍でもあって、実はレーシングの子供たちがどんどん減っちゃって、そっちのみんなで楽しく滑ろうよみたいなところが増えて、それは僕ら的には全然嫌なことじゃなくて、いろんなスキーの楽しみ方がありますので、あとスキーだけじゃなくてスノーボードとか、いろいろなアクティビティーがありますから、僕の思いとしては、せっかくなら家族でたまの休みの日には子供も両親も合わせてスキーができれば、そういう環境にあるので、やっていただければなという思いだけです。

以上です。

【扇田委員】 分かりました。

【平尾会長】 ありがとうございました。

深澤さん、いかがですかね。

【深澤委員】 今のスキーの話に関連して言えば、ライフステージによって、同じ梅池のスキー場に行っても受け取り方が違って、若いときはがらがん滑りたくて、リフトの便利がいいとかというところを見たりするんですけど、子供ができて、ちっちゃい子を連れていくと、子供を遊ばせられるところとか休憩できるところとかというのを、そういう視点から見たり、年齢が上がってきて見ると、ずっと滑るのはしんどいから休憩するレストハウスがもうちょっと充実したらなとか、アクセスのここを登らないと帰れないとか、そ

ういうところに気がついたり、立場とかライフステージとかで気がつくところも違ってくるので、いろんな年齢のいろんな立場の人がスキー場を見て、先ほども言われたユニバーサルデザインになっていけばいいなというふうに感じました。

あと、答申書についてですけれども、住民の人に公表して、それで、みんなが自分事として受け止めてもらえるような形にどうやったらできるかなって今、思っています。先ほども、行政のほうも縦割りになっていて、観光じゃない人は、ああ、これ、観光の答申でしょうみたいな感じに思うかもしれないし、観光業に携わっていない人は、自分たちには関係ないと思うかもしれないけど、そうじゃなくて、間接的にみんな、自分事なんだよというふうに受け止めてもらったり、間接的にもやれることがあったりとか、参加できたりとか、得することがあったりとか、そういうみんなが興味を持ってもらえるものなんだよというのをお知らせできるような仕掛けをつくっていきたいなと思っています。

それで、住民の人も含めて、みんなが何を決めて、何をしてくれるんだという感じじゃなくて、自分たちがそこにどういうふうに参加できるかという、積極的というか、能動的にどう関われるのかなというふうな、自分たちも一枚かみたいというふうに思えるような持っていき方というか、そういう仕組みづくりができたらいいなと思いました。

【平尾会長】      ありがとうございました。

深澤さんの最後の誰かがやってくれるだろうと、やっている当事者が全然やらないじゃないかというふうにして、それを責めることではなくて、むしろ自分がそこに関わって、自分のこととして前に進めていこうと、案外、こうやって1つのことを、プロジェクトということがいいかどうか分かりませんが、仕組みの中で自分が役割を持って何か推し進めるということは、何て人と人とのつながりができて楽しいことだろうと、そういうことでみんなが喜んでくれて、みんながいい村だなと思ってくれるという、そういう自分事にしていくということは、多分、今回の審議会の中のメンバーの皆さんは、これに異を唱える人はいないと思う。これは大きく全面を使っていく主要な考え方だなというふうに思います。改めて、今、深澤さんのお話でそんなことを感じました。とても大事な点だろうというふうに思います。

それから、行政について、これは私が報告した部分との関わりもあったんですけど、行政に対しての過大な期待というか、問題が昔よりも単純ではないという、困った人がいて、健康を害した人がいたら保健師さんが行って、どういう生活して、生活習慣病の改善、こうやったらいいですよと言って指導をして、その指導に従ったら、その人は何の問題もな

く病状が改善したよとか、非常に分かりやすい感じの時代では徐々になくなっていっているわけで、だから、行政が抱えている課題って、すごく多くなり、深くなり、高度化して、専門的な知識も必要になってくると。一方で何が起きているかという、行政改革の中で人員は減らされているという状況がある。予算も減らされているという状況があって、なかなか役場で全部それをやってくれというのは大変難しいことかなというふうに思います。

だから、前回のペーパーの中にも、行政の役割として、むしろサービスを提供する専任者ではなくて、民間のいろんな人たちとの連携を取って、そういうサービスを提供する仕組みをつくっていくということが行政の大きな仕事になりつつあると。だから、そのプラットフォームづくりということになるんですけれども、今回、今の話のように、行政にお願いって言っても、なかなかそれは思いどおりにいかない。だったらどうするんだというときに、民間企業と住民の皆さんと行政と、そういう仕組みをしっかりとつくることによって、今まで期待されたものがなかなかちょうど隙間に落ちるような感じになって賄えない。そこをうまく供給していくような体制づくりというのは、3,000人弱の村であれば十分顔の見える関係でそういうものが出来上がってくるんじゃないかということ、それがうまくいけば、観光地域づくりというのは相当いろんな場面でうまくいく可能性もあるというふうに思いますので、サービス・プロバイダーからプラットフォーム・ビルダーへという言葉を使っているんですけれども、プラットフォーム・ビルダーとしての役割はとても大事になってきて、それが住民の自分事によって支えられるということになっていく。そんなこともこの答申書の中にはしっかりと入れていきたいなというふうに思っております。

ざっとご意見を頂いた、じゃ、高山さん。

**【高山委員】** ちょうどお話ししようと思っていたところで、深澤さんが非常にいいきっかけをつくっていただいたのでありがたいんですけれども、今、会長もおっしゃられたことなんです、この観光振興に関する答申が出て、多くの方々は、なかなか余計なことまで、新しいことが出たというふうに感じる方もいらっしゃると思います。

実際は、既に既存の村の施策なり事業なり計画なりというのが動いているのもありますし、それから、これから動くというのものもあるはずですよ。例えばですけれども、今、小谷村で54プロというのをやっていたら、54プロの中にも実は観光と人が密接、あるいは間接的に関係するようなことがたくさんあるはずなんです。ですから、54プロだけじゃないんですけれども、福祉関係のことであったり、国土交通関係のことだ

って、いろんな計画が実は観光との連携があって初めて小谷村の観光が成り立ってくるんだということを認識して、それをもう一度再整理というんですか、観光に向けてのポイントをお互いに鍵と鍵をくっつけるような、そういう仕組みづくりをつくって、いろんな事業、計画、施策がリンクして、相乗効果を上げていくということの取組をしていただくというのが多分、非常に大事じゃないかなと思います。

それはこの答申の中に入れるかどうかは別ですけれども、そういった視点も次の観光ビジョン、あるいは、具体的な事業の中で取り入れていただければと思っております。その中で、人材というところも非常に大事ですから、人材の育成、あるいは発掘、54集落の中には非常にすばらしい方々がいらっしゃると思いますから、そういった方々のお知恵をお借りしながら、観光というか、地域づくりを進めていくんだという、そういう視点を取っていくというのが大事じゃないかなと思っております。

以上です。

【平尾会長】 ありがとうございます。

では、武者先生、最後、どうでしょうか。

【武者委員】 今、委員の皆さんのお話を聞いて、非常に私、勉強になりましたので、2点ほど、答申書を仕上げるに当たって、今、皆さんの意見を聞いて思ったことがあるんですね。1つは、もう少し観光とは何かとか、スキーリゾートとは何かとか、あるいは観光課の仕事とは何かとか、そういった一つ一つの言葉の再定義、非常に原論的などころですけれども、こういうものをもっとしたほうがこの答申書のよさが生きるのではないかなと。聞いていても、皆さんの中で従来使った言葉とは全然発想が違う使い方というのが出てきていると思うんですね。その辺りをもう少し明確に答申書の中に書き込んではいかがかなということを感じました。

例えば、私も自分が発表した中で入れていただいているルーラリズムという言葉があるんですけれども、これも、ぱっとキャッチフレーズに使ってしまうと、ふわっとしてよく分からないんですね。ルーラリズムって日本語になかなか訳すのは難しいですけど、例えば、田舎主義みたいな言葉になるかもしれませんが、これは明確に人口増加を追求しないという意味なんですね。

経済学で、従来はいろいろ資本、設備を増やせば、人を増やせば、どんどんもうけが増えるというフェーズにあったわけですが、これが今の時代ってなかなか人を増やしても、設備を増やしても、むしろ収入は増えない。これは収穫逓減というふうに言います

けれども、そういう時代に入ってくるわけですね。そうすると、むしろ同じ観光資源だったら、人が少ないほうが一人一人のもうけが増えるという状況になってくるんですけども、これがなかなか理解していただけないんですね、私もいろんなところで話すんですけど。

つまり、人口増加が全ての正義ではないよという時代に入ってきている、このことをもう少ししっかり、これは自分が書き込むところですけども、しっかり定義づけしたほうがいいんじゃないか、ほかのこともそうですね。先ほど、扇田さんが言った観光という言葉の意味合いとか、行政の仕事もそうですね、そういったものをもう少しきっちり再定義していく必要がどうもあるのかなという感じがしました。

それから、もう一つは、要は、答申書が次の観光振興ビジョンにつながっていくわけですけども、皆さんの話を聞くと、ビジョンというのは単なる従来あるような行政計画ではどうもないわけですね。つまり、観光振興のビジョンというよりは、行革ですとか、教育ですとか、ICTとか、そういったものも含んだビジョンであり、かつ、これも行政計画というよりは官民連携のアクションプランみたいなものですかね。そのぐらい性格づけが違うんだということを答申のほうで少し最後に、こういうものをつくっていききたいというところを入りたいなど。

となると、例えば、また新しい行政計画をつくると、おそらく現場では、従来やっていた事業をその計画のどこにぶら下げりゃいいんだいという、先ほど高山さんが、ある意味、事業の再整理というのを話したんですけど、本来そうあるべきものが、結局、今まであったのもどこに取りあえず置けばいいんだみたいな、非常に本末転倒な作業が現場で起こりそうな気がするんですね。でも、そうじゃなくて、これは単に行政計画じゃないと。もっと官民連携、民間を巻き込んで、考え方自体、発想自体を変えていくんだという、そのぐらいの言い方をビジョンに向けて書き込んでみてはいかがかなというふうに思いました。

以上です。

**【平尾会長】** ありがとうございます。

武者委員の2つのご指摘、全くそのとおりだなというふうに思います。ここにもルーリズムという言葉、中間取りまとめのときにも使って、一体、じゃ、これはどういう意味なんだという話は、必ずしも明確に定義をして使っていたわけではないので、多分、今回の審議会の中で、何となくこの場で共有したことというのが従来の定義と違っているというところが多々あったというふうに思います。その辺、再度、定義する必要があるかなと、

こういうふうに思います。

それと、2番目も全く同感でして、この審議会の答申を受けて、行政がよくある行政の観光ビジョンをまたつくってどうするという話は前々から感じておりました。今、武者委員のおっしゃるとおり、官民連携アクションプランという言葉が一番ぴったりするのかなと。行政だけでは駄目で、住民だけでも駄目で、民間だけでも駄目なので、そういう一つのプラットフォームが実際の事業をどういうふうに行って、成果が出るようなことをしていくのかという、その道筋をつけるのがこの審議会の答申を受けてつくられるビジョンということに多分なるんだろうなというふうに思います。まさに官民、地域住民参加型連携アクションプランということになろうと思います。そんなこともこの答申書の中にはしっかりと入れていくべきだなと、こういうふうに思いました。ありがとうございました。

これで一渡り皆さんのご発言頂いて、時間もあと5分ということですが、あと、どうしてもこれだけは、扇田さんが言うのと長くなっちゃうから簡潔に。

**【扇田委員】**      じゃ、簡潔に申し上げる。

前回、議会とお話ししたときに、私、申し上げたことがございまして、1つだけあれしますが、僕は新聞で読んだ以上の情報は持っていませんけれども、これだけこれから大変な観光、もしくは小谷村の産業施策の大転換の時期に来ているというようなときに、僕は議会と理事者というのは、今、対立しているべきではないというふうに思っています。これをやるには、議会と理事者というのは車の両輪だと思うので、この辺りを今後どういうふうにしていくかという辺りが非常に重要で、そのすり合わせだけに時間がたって、ふっと気づいたら、変な言い方ですけど、村長さんの任期がもうなくなっていたというようなことがないように、議会との関係について、政策論争として対立し、そして、お互いが議論し合うということは非常に重要なことだと思いますけれども、それ以外のことで議会とあれするような、新聞ネタになるようなことはこれを機会に収束できるように、僕はぜひ頑張っていたきたい。

それがこの答申書の中身が一步進むか、半歩進むか、10歩後退するかは僕は第一歩だと思えるような気がしていますので、ぜひそのところはよろしくお願ひしたいというふうに思っております。

**【平尾会長】**      ほかはどうでしょうか。

藤原さん。

**【藤原委員】**      この後、官民連携のアクションプランをどういうふうにしていくのかと

いうのはすごく楽しみなところではあるんですけども、ぜひ若い人たちもメンバーに入れてほしいなというふうに思っています。どのぐらい若いかなというのはどうかなというところはありますけれども、大人たちが考えるものだけでなく、20代とか、もっと若い人たち、これからを担っていく人たちの意見もぜひ取り入れてほしいなというふうに思っています。

【平尾会長】 次の段階でのビジョンは、また次の段階での役の中できつと決めていくというふうに思いますので、そういうアクションプランについては次の世代の声が反映できるような、そういう人たちを中心につくるような、そういうことを答申の中に入れていくということになるのかなというふうに思います。

あとはよろしいですかね。どうしてもこれだけは、これを言わなかったら今日帰って寝られないとか、そういうことはないですか。いいですかね。よろしいですか。

じゃ、これで、若干まとめ的に申し上げれば、最初のペーパーの1ページ、2ページから答申書の概要等々については、大体こんなスタイルを進めるということでご了解頂いたかなというふうに思います。答申のスタイルについては、150ページ、全員にとということにはならないので、適宜、10枚のケースもあれば、あるいは概要版というような形、これは少し図表が入って分かりやすいというのにも必要になってくるだろうというふうに思いますので、その辺は、分かりやすさと住民の皆さんに伝わるようなものを目指していきたいということ。

それから、どうやって普及、浸透させるというお話が随分出たんですが、新しいメディアをうまく使うということも、これも大事なことですので、CATVに対してしっかり番組を作るということから始まって、あるいはYouTube等々、こういうものも、動画で知らせるということもきつと必要になってくるだろうなというふうに思います。

あと、いろんなご意見が出たと思います。この辺をもう一度まとめながら、この答申書の中身をつくってまいりたいというふうに思います。

いずれにしても、先ほどのお話にあった自分たちが自分たちの地域を自分たちの力でつくっていくんだという、当事者としての役割、その当事者としての役割がきちつと反映できるような仕掛けや仕組みというのが重要で、これはほんとうに議論が必要だと思いますので、そこはまた具体的な場面での議論が必要、検討委員会のようなものが多分必要になってくるだろうというふうに思います。

それから、答申書の中に再定義というお話がありましたが、これはぼんやりとした形で

使った言葉はぼんやりとしてしか伝わらないので、明確な定義の下にきちっと伝えていくということだろうと思います。この答申書に基づくビジョンというのが、今も藤原さんからあったように、次の世代への具体的なアクションプランというのであれば、若い人たちに支持されるようなアクションプランということにもきつとなってくるんだらうなというふうに思います。

それから、行政の縦割りということについてなんですが、行政側からしても、複雑になればなるほど、こんな人員とこんな仕事の量でできるかなということがあるんだらうというふうに思いますので、それについては、むしろ、いろんな官民連携のプラットフォームをしっかりとつくることで、みんなの力でそれを結集しながら、課題を解決していくというような体制づくりというものが大事になってくるんだらうなと、プラットフォーム・ビルダーとしての行政の役割、これが逆に重要になってくるんだらうな、そんなふうに思っています。

ということで、これで3時半になりましたので、一応、特に何か、よろしいですかね。

では、審議の議題について、議事については一応そういうことで終了したいというふうに思いますので、あとは事務局にお渡しします。

【観光振興課長（関）】 ありがとうございます。

次はその他ということですが、事務局のほうでは特に用意していることはございませんが、皆さんのほうで何かございましたらお願いしたいと思います。

それでは、皆様、大変、本におきまして、長時間にわたる慎重なご審議を頂きまして、誠にありがとうございました。また、皆様におかれまして、大勢の方からご参加を頂きまして、ほんとうにありがとうございます。

村長から一言、お願いいたします。

【村長（中村）】 皆さん、どうもありがとうございました。

第7回の観光地域づくり審議会、いよいよ答申に向けてということで活発な意見を交わしていただいたというふうに思っております。非常にイメージ的であったというか、話の中に、村民の皆さんが当事者としての感覚を持ってもらう、そのように我々が仕向けていかないかんなどというふうにつくづく思ったんですけれども、私も、最初からいろいろとやるには、村民の皆さんから理解を頂いて、村民のみんなで作って上げていく、いわゆるボトムアップしていくというやり方をぜひ取っていききたいという形のことを思っていました。ただ、進めるに当たっては、行政が主にならなきゃいけないところもあろうかな

と思いますので、それについては、しっかりと取りまとめをして、方向づけを出して、ビジョンというような形で新たな、先ほどもありました官民連携のアクションプランというような形のもので持っていけるような格好にしたいと思っております。

それから、政策の関係について、扇田委員のほうからもありましたけれども、そこについては、やはりしっかりすることはしていかなきゃいけないというふうに私自身も思っておりますので、これはぜひとも、今日、議会の皆さんもお越し頂いております、今日は職員も何人か、いつも審議会のあるときは呼びかけをしているんですけども、交代交代で来てもらって、この議事内容等について見てもらっておりますので、そういった意味でも、観光地域づくり審議会はいろんな意味で村民の皆さんに広く行き渡るような形のものにしていきたいと、このように考えておりますので、よろしくお願いをしたいと思えますし、しっかりやるべきところはやっていきたい、このような形で思っておりますので、よろしくお願いをしたいと思えます。

ほんとうに、今日は、時間の関係をきっちりやっていただきましてほんとうにありがとうございました。ぜひとも、お気をつけてお帰り頂くようにお願いしたいと思えます。どうもありがとうございました。

**【観光振興課長（関）】**      ありがとうございました。

それでは、ただいまをもちまして、第7回小谷村観光地域づくり審議会、閉会とさせていただきます。ほんとうにありがとうございました。

— 了 —